研究ノート

鹿児島の地場企業(4)

——大島紬企業・安田織物株式会社——

児 嶋 正 男

1 はじめに

大島紬の業は，その名に示されるように奄美大島に生じ，その顕著な風土特性を伝承して発展し，鹿児島県の代表的地場産業として成立している。

われわれは，この地場産業を形成している多くの企業のなかで，戦後奄美大島において，その大方がたどったであろう生成発展の過程をたどりながら，なおかつ一極に特異の存在を主張している企業として，安田織物株式会社を見出した。安田織物株式会社は，それが通常の大島紬企業の一つであることはいうまでもないが，そのつもりで安田織物を訪ねると，そこに当然に存在すると考えられる会社の表示ではなく，奄美染織資料館，奄美絣協同組合の看板がかかっているのに驚かされる。安田織物は，戦後の大島紬産業の発展と歩みを共にして形成を遂げ乍ら，“企業”としての未来への模索をたえず続けてゆくことに，その事業の存在を賭けようとしているごとくである。一方に奄美古来から伝承の染織資料の収集展示を図る資料館の開設に意欲を燃やし，また一方ではこの地の誇る本場奄美大島紬ならぬ，奄美絣の看板を掛けての展開，それはこの地域社会での紬業の流れのなかで，微少な，ささやかな一つの地場企業を如何に息吹かせようとの企図なのであろうか。われわれは，この安田織物株式会社の

形成存立について，創業者が如何に歩んだかを中心にして，そのあり方をみてみることとしよう。

2 紬の機音のもとで

安田直信氏が安田織物と名乗って紬業を創めたのは，昭和31年10月15日，彼が35歳のときであった。彼は幼少のときから紬業に従事していたのでもなく，親から事業を引き継いだのでもなく，紬業とは無縁のサラリーマン業務に従事していたのを止め，4年間の大島紬製作の技術・技能修得の後，今日流に言えば脱サラし，新らたに大島紬業に取り組むことになったのであった。

とはいえ，奄美の風土のなかでは，紬業を創めることは誰でもが先ず思いつく，ごく自然のことであった。彼は大正10年8月31日奄美大島の大和村に生まれたのであったが，その頃の大島での暮しは，紬織りの機音の中で過されるものであった。彼の父親は，当時地区の紬の税金徴収の代理人をしていた。

当時大島紬には織物消費税が徴収されており，各部落に代理人が置かれていた。このことについては，次のような談話がある。

「織物消費税……私共の先祖は戦前織物消費税と云って大島紬を通して間接に割高の税金を高級品横織りを問わず検査の度毎窓口で税金を払っていました。

国税として取り立て易い税収であったと思う。税務署員は一人織工の紬業者でも脱税するのではないかと常に地方巡視をしていたので，田舎の紬業者は鬼のように税務属を恐れていた。

税務署は紬業者との連絡役に各部落に織物代理人を置き，紬の立付織り印を厳重にさせていた。郡内に織物代理人が七，八十名居たと思います。この紬の課税査定係りは森田義盛氏や森山正照氏，俵砂夫氏が当り窓口で一定毎に絣のマルキを数え，品数を読み掛合せて標準税額に合せて明細書を作成，出張税務員立会いで現金納入し紬の検査証票に税の印を押していました。紬の移動は税印の押されたものか又は移出申告書の付いたものでないと途中で万一署員に分かると罰金に処せられていました。[1)]」

1) 「本場奄美大島紬協同組合創立八十周年記念誌』本場奄美大島協同組合，昭和56年，242～243ページ。

安田家は紬業を行っていたわけではないが，このような業務の性質上，しょっ中多くの紬業者が出入し，また，当時は若い娘は誰も紬織りに従事するのが当然であったから，彼の三人の姉も紬を織っていた。

また，村の状況は，戦前は若い織子がいくらでもいたので，名瀬の業者もあちこちに出機を出し機場を作っていた。20人位入る工場がづらっと並んでいて，本当に活気に充ちて紬織りが行われ，それに青年団が競争をさせるので，夜通し紬織りが行われることもしばしばあったという風であった。大和村は，戸数三百五，六十の村であったが，若い織り子が四，五百人もいて紬織りがとても盛んであった。奄美の多くの村々では，紬織りの盛であった大正末より昭和の初期においては，このような状況が島内至るところでごく通常のことであったようである。竜郷町内においての紬織り風景について次のような談話もある。

「私が紬織りをしていた頃，大正十三，四年電気も無く紬織りの夜なべは石油ランプでした。巻タバコ等吸う青年はなくキセル煙草で石油ランプから火をもらい紬の糸を焼く等しばしばでした。年中行事の一週間前とか五日前日は決って競争織りを青年団で催していた。私の円等は山と海に面した田畑の無い所，男も女も紬織りと漁業しか出来ない村，競争織りはラッパで終り，其の度毎成績を一位から村の掲示板に発表していたので，皆んなが懸命でオサ枕で織る人，一番鳥で織る人，働き過ぎる程でしたが夜遊びも楽しかった。三味線やバイオリンを道びきながら島唄や枯すすき，籠の鳥を唄い歩いたり，紬工場に上り込み娘達と合唱をして機織のとぎをしたものです。

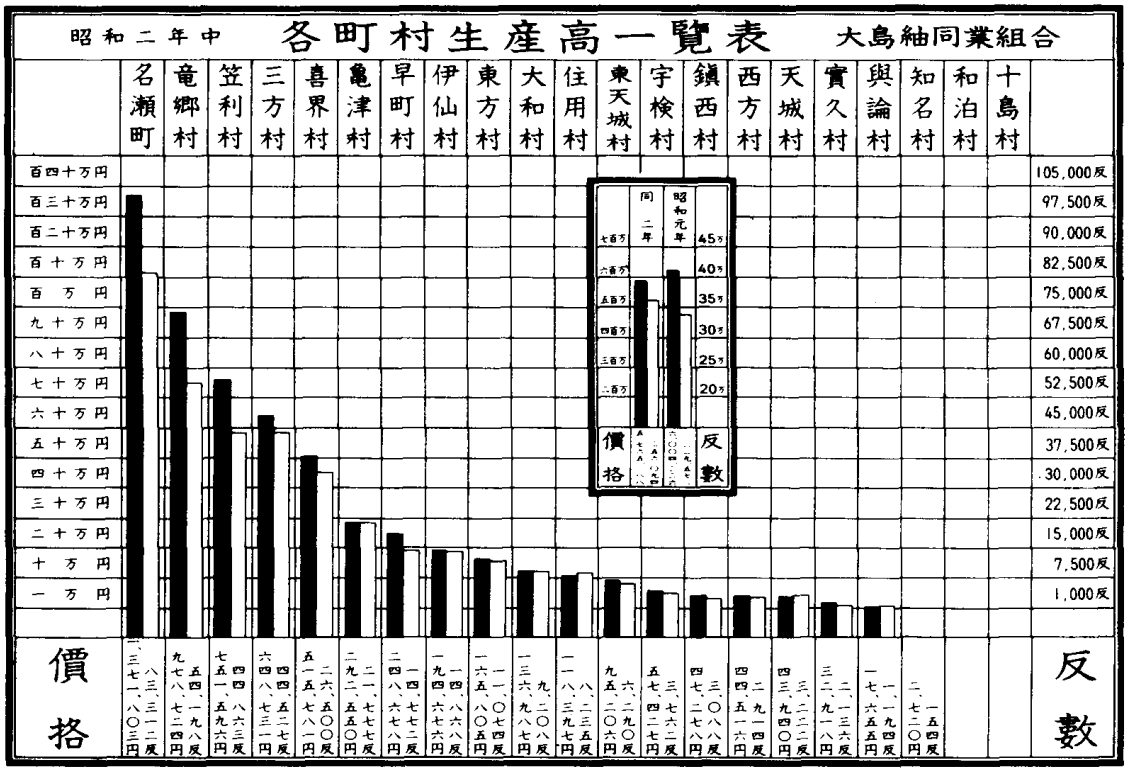
紬を織り切る毎に，友人と連れ立って名瀬迄五里の道を歩いて八千代館の活動写真を見たり，ヤンゴ通りを歩き廻った事がなつかしい。[2)]」

その頃，奄美大島各町村（現在の名瀬市もまだ名瀬町であった。）での生産反数は表１のとおりであり，奄美全体での紬生産反数および価格は表２のごとくである。戦前戦後，昭和60年までの本場奄美大島紬生産高は表３のとおりで，生産反数では昭和２年が最高となっている。

---

2) 『本場奄美大島紬協同組合創立八十周年記念誌』本場奄美大島紬協同組合，昭和56年，246～248ページ。

表1　奄美大島各町村生産高一覧表(昭和2年)

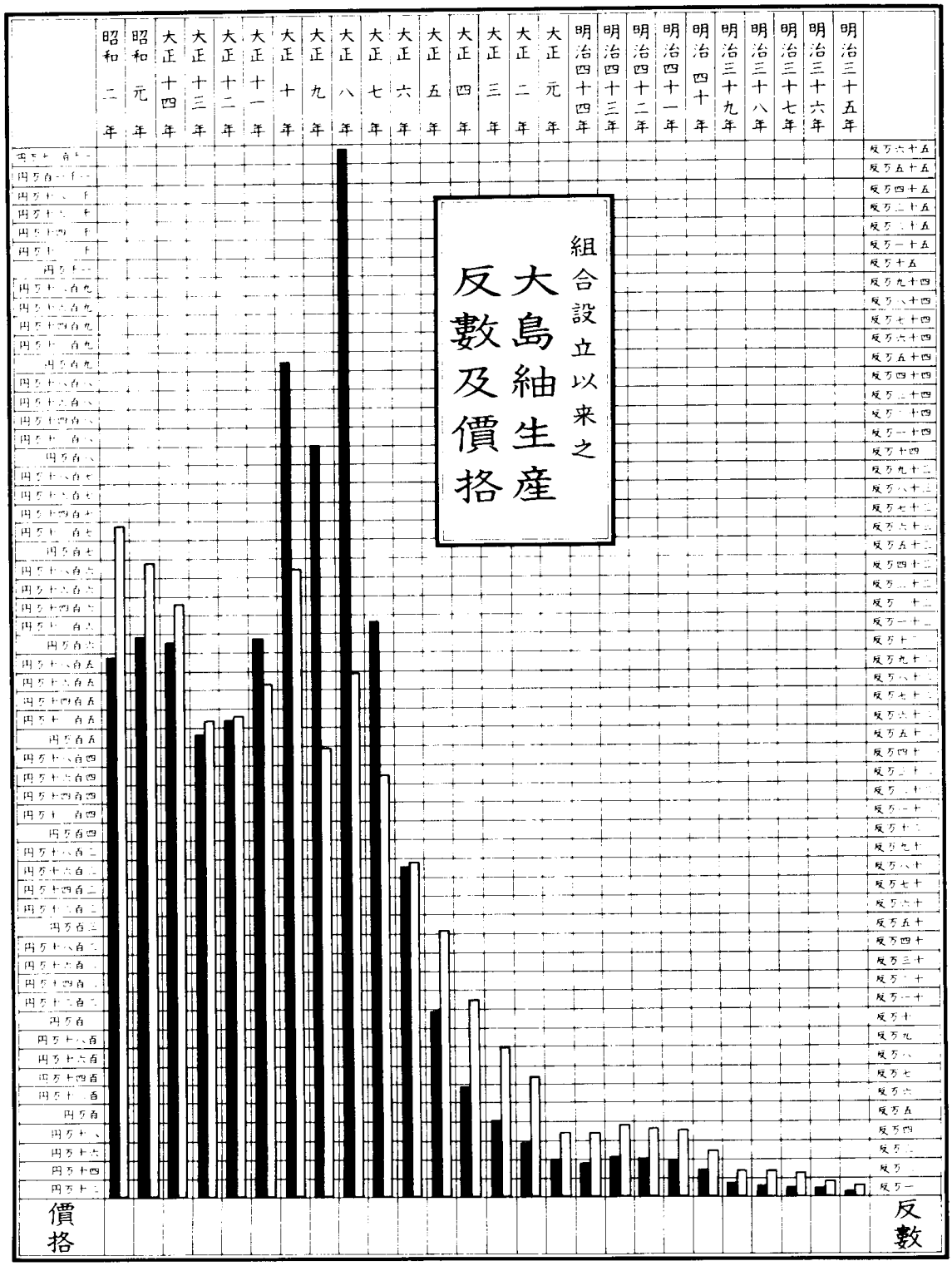


資料：本場奄美大島紬協同組合

ところで，昭和の始め頃，通常紬織りで得られる月収は60円であり，高級品を織れる者は80円もとれ，それに，戦時中産業組合の組合員になると90円もらえたとのことである。もっとも，従事する時間は朝から晩までで，かなり長時間の労働であったが，それにしても，当時の小学校の校長先生の給料よりは，腕のよい若い娘の紬織りの収入の方が上であったということである。だから，紬の織れる女手のたくさんあるところは，裕福に暮すことができたという。

このような状況のもとでは，紬は生活そのものであり，紬に依拠すれば生活は成り立つというのが奄美における人びとすべての思いであったにちがいない。そして，紬を織るのは，今日とはちがって，若い娘たちであり，紬織りの技能は小さいときから祖母から教えられるのが通常であった。奄美では，「六十うつちゆはたんあぶしからあつかすな」（六十歳すぎの老人には田のあぜを歩かせるな……六十過ぎたら老人に労働させるようなことをしてはいけない。）ということで，老人は家にいてもらうのが孝行の基本ということであった。したがって，老人は終日家にいて孫と暮し，祖母が女の孫たちに教えることは紬織

表2 大島紬生産反数および価格（明治35年～昭和2年）



資料：本場奄美大島紬協同組合

りのいろはであり，女の子たちも紬織りを手伝いつつ，自然にそれに習熟することになり小学校出れば機織りするのが当然のことと考えられていたという。

しかし，安田直信氏は男の子であり，紬染織に直接かかわることはなく，13

表 3　本場奄美大島紬協同組合創立以来の生産反数

明治35	5,084	8	278,820	11	226,899	28	38,155	45	227,522
36	9,408	9	239,053	12	206,943	29	32,840	46	248,491
37	11,217	10	334,228	13	235,521	30	42,095	47	284,278
38	13,345	11	273,521	14	235,230	31	57,268	48	265,541
39	14,450	12	258,631	15	217,590	32	68,550	49	255,025
40	24,687	13	254,305	16	237,548	33	66,832	50	255,925
41	35,536	14	317,264	17	258,338	34	60,002	51	251,612
42	36,443	昭和元	339,474	18	251,024	35	70,207	52	254,018
43	39,527	2	356,094	19	41,982	36	84,394	53	240,551
44	32,842	3	328,962	20	0	37	101,285	54	252,272
大正元	34,335	4	291,729	21	3,083	38	128,649	55	267,565
2	57,999	5	311,440	22	2,590	39	137,753	56	266,249
3	80,819	6	310,530	23	6,670	40	158,583	57	256,597
4	96,340	7	310,666	24	1,070	41	185,863	58	255,196
5	141,915	8	291,805	25	681	42	195,455	59	262,363
6	189,747	9	295,896	26	22,291	43	205,599	60	238,547
7	237,225	10	285,384	27	34,011	44	220,430		

●昭和60年の生産反数を戦前最高の昭和２年の生産反数に比較すると67.0%である。
●現在と当時の製品とでは，品質，内容面で相違があり一概に生産性の多少は論じられない。
●昭和47年まで逐年上昇を続けてきた生産反数が，48年以来減少しているのは，製品の高級化指向，検査方法の変更，不況の影響等によるものと思われる。
資料：本場奄美大島紬協同組合

歳のときには奄美の地を後にして大阪の兄のところに暮すことになるのであった。

3　技術創造の教え

安田直信氏は，高等小学校の２年生のときから大阪の兄のもとに暮すことになった。それは，彼が小学校のときからよくできる子供であったので，是非進

学させたいというのが親や兄姉たちの願いであったが，本人は寝小便のくせを苦にして，外に出て寄宿舎に入ることをいやがり，地元の高等小学校に行っていたのを，だますようにして大阪に連れてゆかれたのだという。大阪では高等小学校を卒えると，大阪市立第二工業学校（夜間課程）に入学させられ，その機械科を卒業することとなった。

工業学校で強く教え込まれたことは，ここは工業学校なのだから，絶えず発明改善を心掛けて，新らしいものを創る技術を身につけなければ意味がないということであった。また彼にとっては，そこで機械科に学んだことが，――そこには，染織科，化学科などの科があったのであるが――後の大島紬の技術修得，技術改善に却って役立つことになったのかも知れない。機械科での技術の基本についての修得と，絶えざる技術改善への挑戦が何よりも忘れられない技術者の心掛けであるという教えは，その後の彼の仕事への取り組み方について大きく影響したということである。安田氏はここでもよく勉強し，卒業成績は２番であったという。それで，先生方からは，高等工業学校への進学を勧められたのであるが，勉強よりは早く仕事に就きたいということで，航空部品の製造会社に就職した。

昭和14年のその頃は，既に中国に対しての戦争が始まっており，16年12月には太平洋戦争に突入したのであるが，彼は兵隊にとられることなく勤務を続けることができた。ところが昭和18年の旧正月である２月に奄美に帰郷している際，帰り便の船が米潜水艦の攻撃によって沈没してしまい，早々には奄美から大阪に帰ることができなくなってしまった。そのため父親の勧めにしたがって，再び大阪に出ることをあきらめ，当時父親が役員をしていた地元の産業組合に勤めることになった。

しかし，若い男の夢は，産業組合で事務をとっていることによっては満たされず，やがて20年に戦争が終ると，直ちに大阪に出て行くことになったのである。しかし，大阪は焼野が原になっており，会社での仕事はなくなってしまっていて，機械技術者への夢は生かされようもなかった。そうしたことで，彼はまた当時の若者の多くがたどったと同じような生き方，すなわち，大阪・鹿児

島間を往復し建築資材を売る闇屋業を従兄とともに行うことになるのであった。

青春のこのような経験，戦中派といわれる人びとの多くがたどったこのような過程を経て，彼が三度目に奄美に帰ったのは昭和27年のことであり，彼の31歳のときであった。そしてここから彼の紬業への出発が始まるのであった。

4 紬染織技術の修得

奄美に帰った安田直信氏は，父からまた他の多くの人から市役所などへ勤めることをすすめられたが，自分は事業家になりたいからと言って断り，しかし職がないまま，結婚した奥さんの父親の経営する東織物株式会社に手伝いに行った。はじめは一寸の手伝いを暫くするだけのつもりであったが，紬作りは面白く，いろいろと技能を修得してゆくことに興味が湧き，つぎつぎと，紬作りの技術を学び技能を身につけることに没入することになってしまった。やり出すと熱中して，しばしば12時をすぎ，深夜に及ぶことになったという。そして，そこで教えられたものは，何よりも，東織物を経営する，義父東善高氏の紬作りの技術と紬業経営に対する高い識見であった。

東善高氏は，戦後大島紬の技術改良について大きく先導的実践を進め，多くの事跡を残している。本場奄美大島紬組合創立八十周年記念誌の，「復帰後の技術の改良変遷」[3] に記載されているところのみからでも，次のような業績がみられる。

昭和29年「総蚊絣文様への移行」について，東京秋場商店から「一元式総蚊絣文様」の発注に応じて，関係業者とともに研究生産を果す。昭和29年～30年，戦後大島紬技術における最大の開発とされる「泥藍絣の脱色止め」を大島染織指導所染川技師の指導により結実させた試作品第一号泥藍蚊絣二玉角柄エンジ入大島を製織する。昭和30年５月，泥藍脱色の成果より歩を進めて，白大島の開発に成功し，絣糸をエンヂに染め締めをしてから脱色，白地にエンヂ絣で一玉のダイヤ柄の製品を作製。京都市原亀之助商店の展示会に出品して大好評を

---

3) 前掲『本場奄美大島紬協同組合八十周年記念誌』130～143ページ。

博す。昭和30年秋，色大島の試作を手がけ，失敗の連続ののち大島染織指導所の丸山武満氏の協力を得て成功し，紺地に白の蚊絣染，紺地一玉半の一色上り燭光柄の製作を果す。

安田直信氏の紬生産技術の修得は，東善高氏のもとで，東氏がこのような画期的紬技術開発に取り組んでいる時期においてであった。大島紬生産の伝統的技法を，その全般にわたって修得するとともに，伝統よりの革新についても深く学ぶことがあったに違いない。彼がその後紬生産者として，さらに紬業の経営者として成長を遂げて行くに当って，少年の時代に工業学校で技術の基礎を学んだことと，中年にして，紬生産についての最良の師の下に修業できたことは，何よりも大きな享受であったと考えられる。彼はここでの四年間，紬生産のすべての工程について学んだのであるが，東善高氏の工場で行われていたのは，大島紬生産における最高技術の行使であり，さらなる技術改革であった。そして，その修得は，身をもってする実践によってなされるのみでなく，科学の目を以てその論理を把握し，伝統を継承しつつも常に新たな展開を図ることを体得したのであった。

5 小さな創業

東工場へは，始めは手伝いのつもりが，だんだん紬作りが趣味になり，それが高じてこれを仕事にしようと真剣に取り組むことになり，そこでの4年を経て，安田直信氏が紬業を自分自身の仕事として始めることになったのは昭和31年10月15日のことであった。創業は，今も大切に保管されている奥さんが（安田加代子）綿密に記帖されたノート（金銭出納帖）の第1頁によれば，事務用品，ノート3冊，インク，ペン先その他300円から始っている。

安田氏によれば，紬業は自分で紬生産の仕事を行うことができれば，結構儲かる仕事だという。だから紬生産の技能を持つものは直ちに独立しての小さい創業が可能である，と。

紬の生産工程は概ね次の通りである。

A．図案 → 原図 →

B．① 糸 → 糊付，糸繰，整経，糊張り

② 織り締（締機）

③ 泥染め

④ 加工（機にかけれるようにする。）

⑤ 製 織

上記の工程のうち，いちばん肝心なBの①，④は自分でやり，他の工程はそれぞれ，締，染，織工に委託することにより，金が外に出て行かぬようにすれば，やってゆけるのだ，と。もっとも，Aの図案は，問屋から注文を受けたものであったということであるから，それは東工場に勤務していたことより可能になったことであり，彼の場合，作ったものが必ず売れるという道はまず確保されていたのであった。販売先が確保されていること，このことは彼には紬作りにとってもっとも大切なことと考えられた。それは，奄美の紬業にたずさわる人たち誰もが知っている，戦後奄美大島紬復興期の苦い経験によって生じたものである。本土との往来がまだままならぬ頃，自由に作った大島紬を鹿児島の大正寺，大正会館にもって行って旗など立てて売り出したのであるが，さっぱり売れなくて往生したという。売れない原因はデザインがめくら作りであり，本土の新しいデザインに無知で，奄美の戦前からの古いデザインで作ったためであると。戦前のデザインでは，もはや本土では通用しなくなっていた。奄美で作った紬の売れ行きが確保されるのは，本土に復帰して，本土との往来がひんぱんになり，問屋が奄美にやってきて新しいデザインがどんどん入ってくるようになってからであったという。そんなことから，彼は大島紬生産にはデザインが大切であり，それ故にまた問屋の誂えを大変重視している。

作ることは，それが人びとに需められることに依らねばならず，売れないものを作ってもどうにもならない。アイディアとそれを作る技術を発揮することによって，需要を創造して行き，作ったものが人びとから喜ばれるよう販路が確保されていることが生産には最も大切なことであるというのが，その後の安田氏の持論となっている。

さてそれでは，安田織物創業時の経営の実際を見てみよう。

前記10月15日より始まる金銭出納帖および製品受払帖から，創業より1年間の紬生産にかかわる収支および受入反数を拾い出してみると，表4のようになる。

表4 安田織物創業時紬生産関係収支および受入反数

年 月	収 入	支 出	備 考	受入反数
31．10	0 円	2,563 円	機代 3,600 円	0 反
11	0	9,390		0
12	26,900	33,051	機代 9,200	3
32．1	36,000	45,270	〃 4,000	4
2	95,000	56,999		10
3	157,000	79,235	〃 16,700	15
4	147,000	60,737		22
5	137,900	141,800	〃 2,000	14
6	205,000	138,466	〃 3,000	19
7	247,500	143,997	〃 5,400	23
8	177,850	186,579	〃 2,000	16
9	99,350	111,995		9
	1,329,500	1,010,082	45,900	135 反

収入 1,329,500円に対して支出 1,010,082円であり差引残高 319,418円である。これを当時の個人企業の経営概況を示す表5にならって，専従者控除を2人 240,000円とすると，事業主所得は79,418円となる。この収支状況は，表5のうちの安田織物に企業規模の近似するd，f，g，i，j，kなどの企業と比べてみると，この6企業の事業主所得平均は 423,000円であり，d，gの企業を除き，事業主所得は安田織物とは格段に高くなっている。確かに安田織物の創業時は一般に紬がよく儲かる時期であったが，とはいえ，安田織物は創業早々より他の企業と同じように収益を挙げていたのではない。やはり軌道に乗るまでは若干の日時を要したのである。ただ，安田織物の場合，この1年間に生

表5 個人企業の経営の概要

企業名	平均単価	売上高	原材料	給料・工賃	諸経費	差引残	専従者控除	事業主所得	従業員	経営資本	流動資産	機械什器備品
		千円	千円	千円	千円	千円	2人 千円	千円	人	千円	千円	千円
a	18,000	5,800 (100.0	1,450 25.0	2,610 45.0	580 10.0	1,160 20.0	240	920 15.7)	39	3,590	1,702	188
b	20,000	10,000 (100.0	2,000 20.0	3,600 36.0	2,420 24.2	1,980 19.8	3人 360	1,620 16.2)	23	2,210	1,610	207
c	15,000	720 (100.0	168 23.4	240 33.4	144 20.1	168 23.1	1人 120	48 6.7)	7	428	248	63
d	20,000	1,600 (100.0	400 25.0	600 37.5	400 25.0	200 12.5	3人 360	△ 160 △10.0)	11	1,670	470	110
e	15,500	1,240 (100.0	600 48.5	400 32.2	60 4.8	180 14.5	1人 120	60 4.8)	6	1,030	73	50
f	10,000	1,440 (100.0	400 27.8	587 40.7	36 25.0	417 6.5	1人 120	297 2.1)	17	2,800	1,400	240
g	15,000	売上 1,200 締賃 100 (100.0	600 46.0	280 21.5	40 3.1	380 29.4	3人 360	20 1.5)	10	335	105	30
h	17,500	1,400 (100.0	580 41.5	120 8.7	300 21.2	400 28.6	2人 240	160 11.4)	4	2,800	1,400	240
i	12,000	売上 2,400 締賃 50 (100.0	730 29.8	657 26.8	112 4.5	951 38.9	1人 120	831 34.5)	15	908	608	100
j	6,000	売上 1,840 締賃 250 (100.0	600 28.7	650 31.0	10 4.8	790 35.5	2人 240	550 26.2)	12	478	328	100
k	20,000	5,860 (100.0	1,290 22.0	3,411 58.2	137 2.3	922 17.5	2人 240	682 11.7)	18	2,159	1,106	152
l	20,000	売上 2,880 締賃 300 (100.0	576 18.1	1,371 43.0	586 18.4	644 20.5	—	644 20.5)	7	990	765	75

資料：鹿児島県商政貿易課『38年度大島紬産地診断勧告書』

産した紬織物の反数は135反，1反の平均単価は 9,848円であり，表5中のf企業と比べ従業者数は少くて，ほぼ同じ生反を果している。さらに安田織物の昭和32年（1月～12月）の売上反数および売上高を表6にみてみると売上反数は200反となり，反当り平均金額も10,031円と若干の上昇を示している。表4の受入反数の数字に明らかなように，昭和31年10，11月は0，12月は3，32年

表6 32年売上反数および売上高

販売先	売上反数	金　　額	反当り平均金額
A商店	85 反	948,521	11,159
B商事	41	430,265	10,494
C商店	23	210,000	9,130
D商店	12	138,000	11,500
A商協	20	129,000	6,450
その他	19	150,000	7,895
計	200	2,006,286	10,031

1月は4という，創業の準備期間を経た後は，生産も安定し，経営は次第に軌道に乗って発展して行ったであろうことが窺える。

大島産地における昭和30年～37年度の大島紬生産実績調は表7のごとくであり，1反の平均

表7 大島紬生産実績調

年　度	30		31		32		33	
生産量	反 42,095	% 110	反 57,269	% 150	反 68,550	% 180	反 66,832	% 175
生産額	千円 210,475	% 275	千円 286,274	% 375	千円 488,122	% 639	千円 490,240	% 642
平均単価	@ 5,000		@ 5,000		@ 7,120		@ 7,340	
年　度	34		35		36		37	
生産量	反 60,000	% 157	反 70,207	% 184	反 84,394	% 221	反 101,285	% 266
生産額	千円 480,016	% 625	千円 554,958	% 726	千円 812,281	% 1,063	千円 1,351,101	% 1,768
平均単価	@ 8,000		@ 7,900		@ 9,600		@13,400	

資料：鹿児島県大島支庁（%は28年を100%としての比率）

単価は32年には7,120円となっている。安田織物の1反の平均単価はほぼ10,000円であるから，かなりの高級品の安定生産を行い得る力量を持っており，また，紬企業の経営規模としては，織機12台を越えることになれば，表8の規模別事業所数によって見て明らかなように，一応の機業者の地位を占めることと成っている。

表8 規模別事業所数

	1台～4台	5台～9台	10台～19台	20台～29台	30台～49台	50台～99台	100台～	計
実　数	165	62	46	16	15	15	6	325
比　率	50.8	19.1	14.9	4.9	4.6	4.6	1.8	100.0

資料：鹿児島県商政貿易課『38年度大島紬産地診断勧告書（名瀬市を中心として）』。

とはいえ紬業の経営は，表５によってみる限り，その平均事業主所得は，従業員規模20人以下では，313千円，これに専従者分120千円を加えても433千円で１ケ月平均36,083円である。それは表９の製造業，労職，男女別賃金にみられる，管理，事務及び技術労働者の賃金をやや上廻る額であり，この規模までは，利潤獲得型企業として在るのではなく，紬業によってややゆとりある生計を保つことができるという生業的経営として存しているということである。表８のとおり，奄美産地における紬業の過半数は，織機10台未満の企業であり，奄美の紬産業はこのような生業基盤の上に成り立っているといえる。

表９ 製造業，労職，男女別賃金

年	現金給与総額			
	管理，事務及び技術労働者		生産労働者	
	男	女	男	女
昭和31年	31,214 円	12,196 円	20,419 円	8,257 円
32年	33,933	12,920	21,278	8,487
33年	33,798	12,834	20,935	8,390

資料：労働省「毎月勤労統計調査」

さらに，従業員の給料・工賃についてみると，表５による従業員１人当りの平均給料・工賃は86千円，１ケ月当り7,163円である。それは，表５に示される限りでの，男女別も年齢も職種もわからぬままの１人当りの額であるが，表９の生産労働者女子の額に及ばない。表５で専従者控除を１箇月10,000円と設定していることからして，当時の奄美大島産地の給料・工賃がこのような額で妥当だと考えられて決められていたのであろうが，給料・工賃は他の地域に比し低い状況にあったといえる。安田織物においても，この時期の織工の工賃は１反3,000円であり，１反の販売価格が10,000円であったから，十分に儲けがあったとされる。しかし，経営成績については，表５のｂ企業，ｋ企業に明らかなように，給料，工賃のもっとも高いところがもっとも良好であり，大島紬業は低賃金・低工賃によって高利潤をもたらすという論理は成立していない。

安田直信氏は企業の安定発展は技術にあるとされる。いよいよ紬業者として独立を果たした彼が，自己の事業のなかに展開して行く，彼の技術発展についてみることとしよう。

6 伝承と革新

安田織物は，安田氏のこれまで習得した技術技能を基礎にしての新たな創業であったが，これまでみてきたように，創業以来順調に推移し，生産量を或程度増加し漸次製品の高度化多様化にも対応しうる体制が整うとともに，経営も安定し，この業によって生計を保ちなお多少の余裕がでてくるようになった。

そうなると当然に，彼は，その持前の技術伝承とその革新の意図をつぎつぎと実施に移してゆこうと試みることとなった。

彼は既に前述東善高氏の白紬開発には，東織物にあってその作業を共にしたのであったが，いよいよ独立して彼自身の織物工場を持ち，それが軌道に乗った昭和33年１月には締機技術で，絣の逆締（反対締）法を考案した。これまでの大島紬は主に冬着尺として生産され，その地色は黒系統であった。これに対して，白地に各種の色絣を出す方法として考えられたのが逆締めである。これまでの方法は絣部分を防染するが，この方法は地の部分を防染する。[4)]

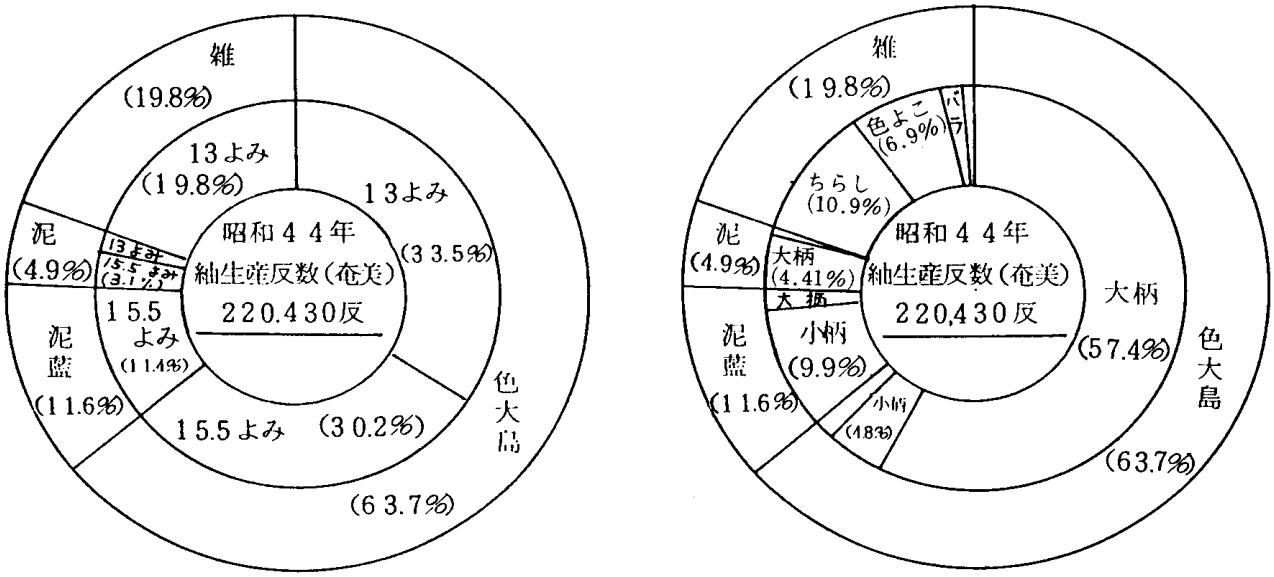
この考案によって，白地の多色入，白黒絣大島を容易に加工しうるよう，絣と絣の間の部分を締めて，染めまたは刷り込み，白大島紬の多色派手物が容易に生産されうるようになった。そして，昭和33年３月には白黒総絣一本道引柄（黒地に白絣，白地の部分に黒絣を同じ生地に織り出す）を完成し，さらに同年９月には，白黒経総絣市松柄を完成した。それが東京三越本店で発表されると，１反10万円という破格の高値で販売されることになり，これによって，色大島紬の生産販売が進められることになり，向後の大島紬生産に，伝統的大島紬に加えての白地大島・色大島として，大きく寄与することとなった。

色大島は，昭和30年代後半から40年代前半にかけて，大島紬復興発展の牽引車的役割を果し，昭和40年前後には，図１にみられるように大島紬生産の主流をなした。そして昭和45年韓国紬問題の発生とともに図２にその推移を示されるように，奄美特質を主張しての泥染め泥藍への回帰が進められることになる

---

4) 『本場大島紬製造ハンドブック』鹿児島県大島染織指導所，83ページ。

図1　本場奄美大島紬染色別生産反数(昭和44年度)



昭和44年大島紬生産反数(奄美)——染色別・密度別
(単位：反)

染色別	15.5よみ	%	13よみ	%	計	%
色大島	66,640	30.2	73,838	33.5	140,478	63.7
泥　藍	25,077	11.4	540	0.2	25,617	11.6
泥	6,726	3.1	4,049	1.8	10,775	4.9
雑	0	0	43,560	19.8	43,560	9.8
計	98,443	44.7	121,987	55.3	220,430	100.0

(注) 雑には，チラシ・色よこ，バラ等を含む。
資料：鹿児島県大島染織指導所

昭和44年大島紬生産反数(奄美)——染色別・柄別
(単位：反)

染色別	大　柄	中　柄	小中柄	小　柄	計
色大島	126,566	1,678	1,695	10,539	140,478
泥　藍	3,463	110	126	21,918	25,617
泥	9,674	365	260	476	10,775

	チラシ	色よこ	バ　ラ	その他	計
雑	23,944	15,296	3,938	382	43,560

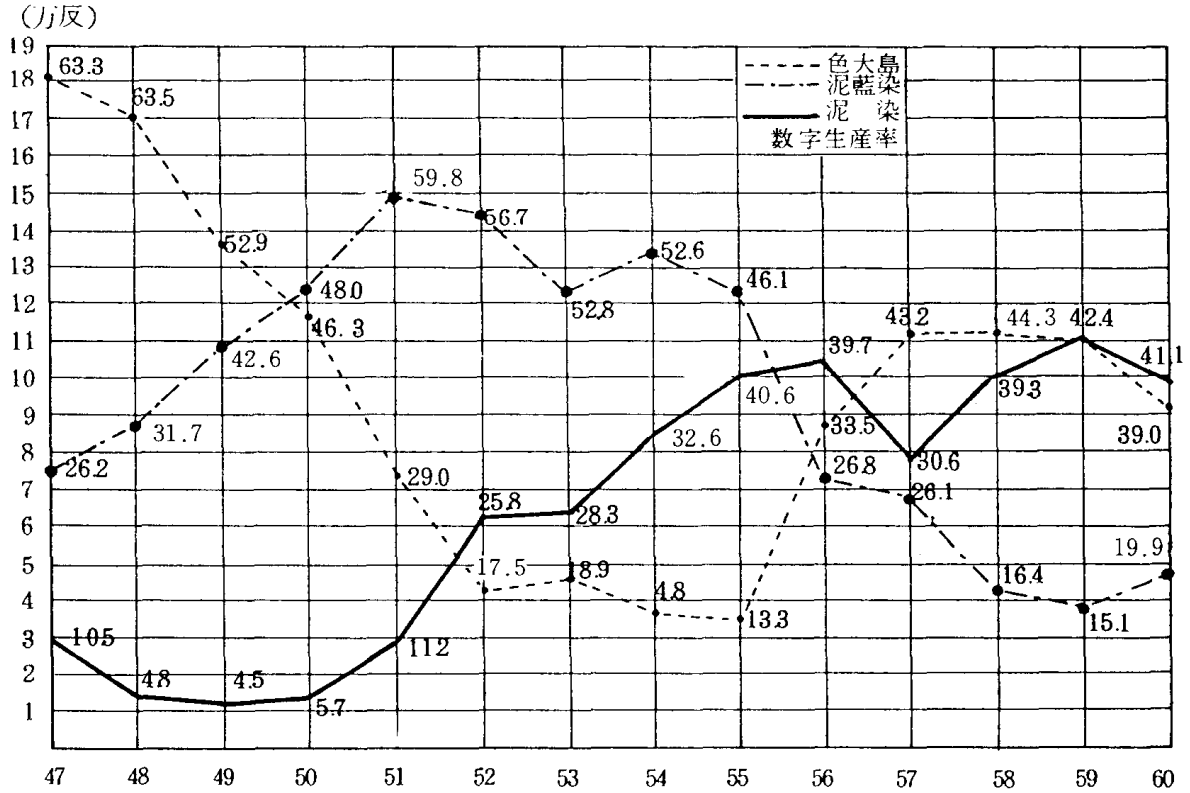
合　計 220,430

資料：鹿児島県大島染織指導所

のであるが，大島紬の伝承は，単に伝統を墨守することによってのみ遂げられたのではなく，伝統は絶えざる革新によって飛躍が果されることを，色大島の生産は如実に示すものであり，大島紬生産の向後のあり方に大きく示唆を与えているものと考えられる。

さらに安田氏は大島紬が和服用の着尺として織られるだけではなく，洋服地にネクタイ用に，その他の用途に織られることも指向すべきではないかと企図する。そしてその場合には，伝統的本場奄美大島紬とは一線を画した，新たな

図2 本場奄美大島紬染色別生産反数の推移



資料：本場奄美大島紬協同組合

製品として産出さるべきであるとする。洋服地としての大島紬生産は協同組合でも試みたが，しわになりにくい生地の生産が難かしいという。しかしネクタイについては，従来着物生地を切っていた方法を改め，ネクタイ用の糸から作るとしわにならないネクタイができるから，そのようにするようにし始めたという。大島紬の多様の発展は，素材を改善し，染織の伝統を生かし，洋服地の生産には機械織りによって行うことがよいのではないかとする。このことは，奄美の手織り業者ではなく，鹿児島の機械織り業者が多様な発展を試みてくれるとよいのだが，安田氏は去年一生懸命やったが，なかなか不況のため機を動かすことができなくていると。

このような考え方を生産の実践に生かすため，安田氏は大島紬の根幹である絣を生かしての奄美大島絣協同組合を作り，本場奄美大島紬の諸規制から解放された，伝承のもとでの革新にとりくんでいる。

このような革新を思い切りよく実践する直信氏は，またまことに稀なる伝統尊重論者であり，古代染織よりの奄美の伝承の究明に畢生の力を傾ける。それ

も一寸やそっとのことではない，凡そ常人では考えられない力の入れようである。何しろ後には，たった一人の力で染織資料館を作ってしまうということになるのであるから。

伝承と革新の安田氏の染織本業におけるもう一つの企ては，古来よりの草木染を現代に甦らさせようとの試みである。万葉の色艶を奈良正倉院に足を運んで感得し，それを奄美の山野の植物によって具現しようというのである。草木染めの試みは，もともと奄美の古くからの染色が草木染にほかならないし，染色の方向として多くの業者に思考され試行されるところであったが，なかなか成功に至らなかった。しかし，大島染織指導所での研究が実って植物染料による草木染大島紬の染織が実現し，色大島紬とは一味違った独特の風合と色調の紬が，昭和37年より製品化されうるようになって，さらに技術改善による高質製品の製作が期待されている。[5] 彼はこの草木染の技術を自家薬籠中のものとし，純植物だけによって，染色をむらなく仕上げるまでに至っている。草木染は染むらが出やすいのであるが，彼は京都の染織作家たちに交じって学び，染織作家としての域を深めつづけている。彼の人並はずれた染織のロマンへの憧れ，染織作家としての心意気について，彼自身の表現を通じて垣間見てみよう。

「草木染は“古典”である。色褪(あ)せしにくい技術，技法に神秘的な不思議さがあり，遠いむかしの人びとの英知が輝いているところに，ロマンがある。

静寂の宵闇に息を凝らし，遠くかすかに聞こえるきぬたを打つ音に恋人の絹ずれの音が交差するとき，あるいはまた，紫式部や清少納言の文学に花開いた平安女性の十二単衣(ひとえ)を想うとき，あらためて草木染の魅力が偲ばれるのである。そして今日，本場大島紬(つむぎ)にようやく，古典的染め方による草木染が甦った。

大島紬のふるさと奄美大島は，その亜熱帯の風土が染料用の植物である楊梅(やまもも)・木斛(もっこく)・イジュ・福木・芙蓉などが山野に豊富に自生するのに適している。

南国の太陽の強い陽(ひ)ざしを浴びて成長した染料用植物は，そのエキスとも

---

5) 前掲『本場奄美大島紬協同組合創立八十周年記念誌』138ページ。

いうべき色素が濃縮され，それによって染色される紬や絹糸が紫外線に耐え抜き，褪色しにくい堅牢さが期待されている。

- -

きものを作るよろこびは，着る女性の美しい装いを，情愛と熱意をこめて創造するところにある。よりよい作品創りを使命とする作家の至誠からこそ，秘法も生まれるものであろう。[6)]」

染織への夢，そしてそれを自らに体現して製品作りに励んでゆこうという彼の心意気を切々と窺うことができる。

このようにして，彼はまた紬生産業者であるのみでなく，染織家として，染織工芸界にも貢献を果してゆくこととなる。そしてその作品は，昭和34年２月にはブラッセル万国博で銀賞受賞，昭和36年４月には全国織物大会において金賞受賞，54年２月には通産省生活産業局長賞受賞，57年６月には第17回西部工芸展入選，58年９月には日本工芸展入選を果し，同年10月からは日本工芸会会員となっている。彼の精進と，それによって得た文化的見識は，次第に広く世間の認めるところとなり，58年５月よりは名瀬市より文化財保護審議委員を依嘱され今日に及んでいる。

7　染織文化への傾倒

安田氏の紬業の開業は，結婚されることになった奥さんのお父さんが，たまたま紬業をやっており，そこへ手伝いに行っている間に染織について大きく興味をそそられ，いわば趣味が高じて紬業を本業とするようになってしまった，ということであるが，染織への傾倒は，これまでみてきたように，伝承の技法を深かめ，新しい技法を生み出しして，大島紬の生産技術を大きく発展させた。そして更に，彼の歩みは，単に生産技術への着目に止どまらず，そのような生産技術が生み出されてきた，奄美の風土，文化的基盤を明らかにし，広く世に伝えて行こうとの思いを燃やし，着々とその作業を展開させてゆくのであった。

---

6)　安田直之助（安田直信氏のペンネーム）「伝統の大島紬」，『光と技』集英社110～112ページ。

奄美染織資料館の設立（昭和51年），それは，上述のような彼の企図を具現した偉業である。近頃はよく，大企業家あるいは大企業の文化的活動として，その収集した美術品を保管展示するために，あちこちに美術館設立のことを聞かされる。たしかにそれは，よき文化資産の蓄積となり，高尚な趣味を教え，美的教養を与えてくれるものであろう。「ゆとり」がそのように費されることは，ときとして貴重な財が，生活や生命をそこなう分野に莫大に浪費されていることより思えば，誠に有意義なあり方である。しかし，安田直信氏は，これまでみてきたように，企業家として大きく産をなし，その資産で以て書画骨董を購い，美術品を収集しうるような状況にあったわけではない。むしろ，それとは逆に，質実に健康な生産をめざし，そしてまた質素な生活のなかでの，資料収集であり，資料展示の意図は，まさに健康で誠実で質素な，作る者と使う者が一体となった，日常の用の美の貴さを訴えようとするものであった。これこそ絶大の偉業と言うべきではないか。奄美染織資料館のパンフレットに述べられた彼の言葉，「奄美の染織について」をみてみよう。

「日本は現在世界における『絣王国』であるといわれている。

絣は今日でも世界の各地でそれぞれ特長のあるものが作られているが，技術的に最も多くの種類を持ち，各種の繊維材を用いて精細な文様を織り出すという点からいえば，日本の絣の右に出るものはない。そしてその日本の絣の中で最も精巧な細い文様を織っているのが**大島紬**である。

言いかえれば，今日奄美群島一帯で作られている大島紬は世界中の絣織物の中で最も精巧なものであるといっても過言ではない。然し今日**大島紬**がこれだけ立派なものに発展したことは決して偶然のことではない。『ローマは一日にして成らず』という諺の通り，その蔭には大島紬生産の先覚者や先輩たちの血の出るような努力と優れた創意工夫のあったことを忘れてはならない。また，それと同時に，この南海の島々に残された織物作りの技術の長い伝統が底力となって今日を支えていることも見逃すことはできない。

当館では第一に今日の大島紬が立派な製品となるまでいかに多くの人々の尊い『手わざ』が積み重なっているかと言うこと。第二にはその底辺に隠れ

ている先輩たちの大島紬完成への努力の跡。更に第三に立派な仕事を残して名も知れず伝統の底辺に沈んで行った，昔の奄美の婦人達の尊い労作の跡を少しでも明らかにしたいと言う主旨のもとに陳列の大筋が作られている。」

大島紬の宣伝販売のための展示館は，鹿児島，奄美のあちこちにみられるようになり，大島紬ができるまでの過程を実演し展示することがなされ，大島紬生産についての理解を大きく進め，大島紬業の発展に重要な貢献を果していることは疑いないが，上述のような展示理念に基いて，古代染織よりの伝承の道を伝え，名を知られることのない先人の労苦を称えて，さらにわれわれ自らがそれを引き継いで行こうという意図のもとでの「体系的資料館」の設立は誠に珍らしい。そこには営利という動機が全く欠落し，ただただ染織の美を，それを形成する業を讃えようとする思いのみがこもっている。染織資料館は，県立図書館の奄美分館の近くに，ひっそりと小じんまりに位置している。そして直信氏はこの資料館の奥の室の一角に書斉を構え，染織関係の資料文献多数の収集をつづけ乍ら，紬業者とは別の染織研究家としての探究にいそしんでいる。

この貴重な資料館，営利を離れてひっそりと高邁にあることはよい。しかし，そのため人に知られることなく，訪れる人も少いということでは，これだけの壮図が空しくついえて，いかにも残念である。入館料などはうんと安くし，地元の中・高校生は必ず一度は見学をすることとし，奄美を訪れる人は，この資料館より始めて，大島紬について連携してのいくつかの展示を見，好ましいと思う紬製品なども買い帰れるようにする宣伝，ことばの真の意味でのＰＲもまた必要ではないかと考えられる。

8 安田織物の現状

これまでみてきたように，安田織物は，安田直信氏の小さな個人企業として発足し，直信氏の技術と技能を核にして運営充実を遂げることができ，昭和38年には資本金200万円の株式会社形態をとることにし，安田織物株式会社として現在に至っている。

昭和61年現在，役員は社長　安田直信，専務取締役　安田荘一郎（直信の長

男33歳），取締役　安田加代子（直信の妻56歳），監査役　東淳一郎（直信の甥38歳），安田善次郎（直信の次男31歳）と，安田家の家族であたり，本社を奄美大島名瀬市に，支店を鹿児島市に，工場を奄美本社，鹿児島支店のほか姶良郡の加治木町，隼人町にも置いている。

従業員は，男子12人（締工４，一般加工５，事務３），女子85人（織工80，事務ほか５），計97人と，約100人となっている。

生産反数は，月産60～70反であるが，ほかに図案を提供して生産を委せている仕入商品が30～40反あり，毎月100反前後を問屋に納入することになっている。

製品はすべて泥染であり，７マルキ９マルキを自家生産し，５マルキは下請に出している。

そして，これらはすべて問屋の注文品であり，京都の市原亀之助商店，東京の秋葉商店に納められる。

現在では，大島紬業経営の大方は安田荘一郎氏に委され，彼は鹿児島支店にあって，問屋とたえず密接に折衝しながら生産計画をたて経営の維持発展に努めている。その堅実な経営に支えられて，奄美においての直信氏の自由闊達なる創作や資料収集も可能になっているようである。

ところで，荘一郎氏の話によると，これまで順調に営まれてきた紬業も，最近では景況が追々悪化してゆくので，安田織物でも，加治木，隼人の工場は閉鎖することにしようかと考えている，という。

紬業が成り立ってゆくには，問屋への納入価格（生産価格）が，織工賃の２倍はなければ引き合わないといわれるが，最近では，７マルキカタス（絣糸１本）１反10万円を割る売価（生産価格）にまで下がってきた，と。そうなるとその織り賃は現在１反５万円～５万５千円であるが，織り賃の値段を下げなければならなくなる。しかし，１ケ月に２反織ることができ，月10万円以上の収入を得ることができる者は，織工のうち１割にも満たない状況であり，それでは，高品質のものを短い時間で織れる若い優れた織工たちは，紬織りには従事しなくなってしまうことになり，紬織りは，質量ともに低下して衰退せざるを

得ない。既に現在でも紬の織工は平均年齢50歳以上と老齢化してしまっているのに，この上老化劣化が進めば紬業は成り立たなくなる，ということである。もっとも，安田織物での織工年齢は比較的若く，平均45歳ぐらいだという。

いわれるように大島紬の産地価格は，昭和60年９月17日の南海日日新聞「紬に吹く風①」によると，表10のように，昭和55年を頂点として下りつづけ，60年には53年の価格をも下廻る状況になったのであるが，61年にはさらに低落を続けているということである。

また「紬に吹く風⑨」によると，織工の平均工賃は，60年９月で６万円，大島紬の産地価格は11万円であるとされており，織工賃と産地価格の推移が，表11のごとく示されている。大島紬の産地価格に占める織工賃の割合は，もっと

表10 13算５マルキ，７マルキの平均単価推移
（参考・物価指数上昇５％，３％とした場合の上昇率）

年　度	53	54	55	56	57	58	59	60／９
平均単価	10.89 万円	12.98	13.62	11.92	11.02	11.43	12.08	10.78
％	100	119.2	125.0	109.4	101.1	104.9	110.9	98.8
５％上昇	100	105	110.3	115.8	121.6	127.6	134.0	140.7
３％〃	100	103	106.1	109.3	112.6	115.9	119.4	123.0

資料：本場奄美大島紬販売協同組合

も高かったのが，58年の57.0％であり，概ね55％前後となっている。紬の産地価格の低落とともに，さらに織工賃がその半分以下に押えられるとすれば，それは正に紬生産の存廃にかかる問題である。

もともと，今日本場奄美大島紬の声価が高いのは，その伝統工芸産品としての，巧緻な労働集約性によってである。高密度の労働価値を包含する故に，それは末端小売価格に反映して，それに対応する需要を引き起こすこととなっている。織工賃を抑え，生産価格を低位に置くことによって超過利潤を得ることに重点をおく，旧来のあり方は，ここにおいて大いに反省吟味されねばなるまい。大島紬の生産と販売については，何よりも，まずは構造的に見直すことが必要であり，それに対応しての企業施策が模索されねばならないと，考えさせ

表11 織工賃と産地価格推移(単位：円)

		55	56	57	58	59	60
9マルキ	織工賃	115,000	110,000	100,000	95,000	95,000	85,000
	産地価格	200,000	190,000	180,000	170,000	170,000	150,000
7マルキ	織工賃	75,000	73,000	70,000	75,000	70,000	65,000
	産地価格	143,000	137,000	70,000	135,000	130,000	120,000
5マルキ	織工賃	65,000	58,000	60,000	60,000	55,000	50,000
	産地価格	125,000	120,000	110,000	110,000	115,000	90,000
13算	織工賃	50,000	45,000	45,000	55,000	55,000	40,000
	産地価格	95,000	90,000	85,000	85,000	85,000	80,000

注：名瀬市内の機屋数社を対象に調査，その平均をとった。
資料：南海日日新聞社

られた。

大島紬の景況は，鹿児島県中小企業振興公社中小企業情報センターによる，昭和61年度２・４半期「大島紬問屋市況調査」によっても先行きますます冷え込みが予想されるようである。このような状況悪化のなかで，今では安田織物の主たる経営責任を担っている荘一郎氏の将来展望は次のようであった。

奄美での大島紬生産は，今23～24万反であるが，あと10万反までに減ることになるだろうといわれる。たしかに，紬が儲かるとなると，紬の生産を何も知らなくても，紬作りに従事し，具合が悪くなると止めてしまうというような人たちもいて，紬が乱造され過ぎた傾向がある，安定生産の方向が目指されなければならない。父（直信氏）は紬生産のことをよく知っている技術者からの出発であったが，家内工業的なこのような生産方法が適合している紬の生産は，その生産過程が全部よくわかっていないと，良い製品はできないからその点父に負けないよう，幸いにも父の作ってくれた基盤の上で勉強して行きたい，と。

安田織物の製品については，目下のところ問屋の誂え品のみの生産であるから，価格交渉のことはあるが，何とかやっていっている。これからは，直接顧客の意向を聴き入れた製品作りをし，このような製品がお客様に喜こばれるの

だという品物を作って，問屋からの図案によって作るばかりでなく，問屋に挑戦してみることをしてみようと思っている。と。このことについては，今もときどき，問屋の指図を変更したものを交じえる試みをしてみると，結構採用されることになる，と。

大島紬については，何といっても染めが重要であると思う。色に気をつけ，単色か，多色か，どのような色が大島紬に合う色か，大島紬を生かしてゆく色の勉強をしたい，と。

大島紬業で一番欠けているのは，横の連携で，産地の生産者連帯がなかなかできないことである。外からみると奄美大島の人たちでの連帯は強いように見えるかも知れないが，なかなか機屋どうしでもつながりができにくく，利己的に走ってしまう方が多い。ここのところがよくなって,産地体制が整えば,問屋に対する対抗力ももっともっとできて，産地全体がよくなることができる。と，いうことであった。

9 おわりに

これまでみてきたように，安田織物株式会社は，奄美大島に生をうけた安田直信氏が，紬作りがその生活から切り離せない機音の環境のもとに育ちながらも,一度は島を外にして,機械技術者としての道へと志したのであったが，戦中戦後の生活のなかで，再び紬作りの作業のなかに，今度は自ら強く引かれて没入することになり，やがて，その技術技能を修得するとともに，それを核にしての，紬生産の小さな企業として経営することが始められた。それは恵まれた諸条件のもとで順調に発展し，それ故に，直信氏は，もてる技術・技能を存分に発揮しての，さまざまな生産技法の改善を試みることができ，さらには企業の利益とは離れて，染織文化への願いを地域に広く伝えるべく，染織資料館を設けるなど特異の活動を展開することになるのであった。そして，今や，安田織物株式会社は直信氏の長男荘一郎氏を中心に，小さい乍らも安定した経営が維持せられ，大島紬業界の深刻な不況に際しても，未来挑戦的施策を以て切り抜け発展を指向したいと，たのもしい姿勢を示している。まことにめでたしと

いうべきである。

ところで，このように伝統の継承のなかでの小さな改善を重ね乍らの小規模生産企業の形成が，集散地問屋の専属形態により安定を得ているという，経営の外在的状況のほかに，もう一つ気にかかることは，経営内において，生産そのものを直接に担っている労働のあり方の問題がある。

大島紬の織工，締工などは工場勤務をする場合でも，出来高により加工賃の計算が可能である作業者は，雇用者としては取り扱われず，家内労働者として委託加工賃が支払われる形態をとっている。さまざまに特異のアイディアをみせてくれる，安田織物であったが，このことについては，地域の壁は厚く，全企業が「一，二，三」との掛声によって一斉に行わぬ限り困難であるとのことである。ちなみに安田織物の場合も社会保険に加入しているのは，役員を含めて8人，役員5人を除けば，雇用形態をとる従業員は僅かに3人ということになる。企業の営む直接の生産作業に従事する人びと約100人のうち，3人の従業員のほかは，自営業ないし家内労働者であるという労働形態である。

大島紬業は鹿児島の誇る伝統産業であり最大の地場産業である。それを形成する企業は，それぞれに工夫をこらし乍ら，担当する業務に力を尽すこと上述のごとくである。ここまでよくも発展してきたものと賞揚される。そして，いよいよここまで発展したものならば，外，産地体制を確立し，内，雇用形態・労働形態を整えて，真に内外に誇りうる地場産業，地場企業として堂々の経営が進められることが心から願われる。